

# 一本の木

福岡市中央区 永井 節子

春、すべての木々が太陽を一杯に浴び、それぞれの命を芽生かせ、そして一生懸命美しい花を咲かせようとしている時期、それが春なのでしようか。

私はいつもの散歩道を爽やかな空気を胸一杯に吸い込み、けやき通りから舞鶴公園へと登る。そこには一本の桜の老木が何事もなく立っている。あたりには見事に今が盛りと、すべての枝葉を生き生きと大空に伸ばし、若々しい生命を感じさせている並木がある。

その中に枝が今にも朽ちさびそうな一本の桜があり、いつの間にか私の大好きな木となりました。なぜか行く度にこの木と会い、たくなり、遠廻りになっても行くようになり、そしていつもの様に自分の背丈程の幹の所をポンポンと叩き乍ら「元気だった？今年もきれいな花を咲かせてくださいね。」と話し掛けるのです。

ある年、足の具合が悪くなり散歩も控えていたため、桜の時期も過ぎ、葉桜の頃かなと思いつつ行ってみることにしたので。小さな坂道を登り、やっとあの老木の前に立った時、なんと二又に分



かれた所のすぐ上に一本の新しい枝が20cm程伸びており、その中程の所に一輪の桜の花が、それは、それは美しく見事に咲いていたのです。他の枝はもう葉桜の新芽がめぶきはじめているのに、本当に一輪の花でした。そしてきれいなピンク色で、私の目にはとても嗜れやかに咲いているように見えました。私は思わず「どうしたの？ 遅咲きだったのね。待っていてくれたの？」といったもの様に幹を叩き乍ら、しばらく根元に腰をおろし眺めて帰ってきましたが、帰り道は心もさわやかに、足も軽くなったようでした。舞鶴公園の桜の並木はいつもきれいに整備されており、私の好きな散歩道です。古代、さらびやかに移り変わったであろうこの地、歴史の重なりを静かに感じつつ、木々は来る春を待っているようです。手入れが大変でしょうが、どうか人々の心をやさしく包んでくれますように、この公園が私の一番の景観目ぼしと思っております。そしてこれから度々あの老木に会いに行こうと思っております。

住々にして都市景観と言えば、注目を浴びる街の華やかな面のみを追いかけがちであるが、日常性の中にも自分なりの小さい景観は存在する。命と絡めた「元気だった?」は作者が「自分に向けた言葉であり、私の景観自慢とは、語りかけは人生であった」と言う事であろうか。  
(選考委員 岡本 均)

# 私の景観自慢

福岡市南区 南野 佐代子

福岡に生まれ、福岡に育ち今年で19年目になる。幼いころから通学のために毎日の様に天神を見てきたが、思い返してみると天神の景観も随分変わってしまった。バスセンター、Z-SIDE、ソラリアステーションなど、天神では四六時中工事が行われていたような気がする。個人的にはこういった都市開発には、自然が失われた人工的な街づくりというイメージがあつて、決して賛成派ではない。

実際、天神を歩いているとビルが迫ってくるような気になり、ゆっくりとくつろげる場所も少なくあまり落ち着かない。しかし、そんな私にも唯一のんびりできる場所が、実は天神のど真ん中にある。「ジュンク堂書店」である。私はほとんど本を読まないが、あそこに行つて窓際のカウンターに座り、向かいのシアトルズカフェをちらりと眺めながら、適当に選んだ本を読んでいると、なぜかとてもおもしろい。それになつたような、いい気分がする。

1階から4階まで、ジャンル別にありとあらゆる本が揃えてあつて、色々な人がそれぞれの目的の専門書を探しにやってくる。

「この人は美術学校の生徒で、次回の作品の構想を練っているのかな?」なんて勝手に想像したりしてしまう。静かで落ち着いた空気が流れる店内は、それぞれの生活を持った人が集まっています。ここが格調高く、それでいて気軽に立ち寄つてくつろげる、新しいタイプの本屋だと思ふ。また逆にジュンク堂書店で買った本を手に、シアトルズカフェでアイスマルクを飲みながらジュンク堂の2階で読書する人を眺めるのも同じ気分が味わえておもしろい。

同じビル街でも、ここは天神に疲れた私を何気なく癒してくれる唯一の場所だ。何年たつてもかわらずに、ひっそりと残つていつか欲しいと願う場所だ。



早回しのビデオテープのような目まぐるしい都市で、とっておきの場所を見つけた作者に共感を感じる人は少なからずいるのではないだろうか。さらに、対面するカフェからの視点に展開しているところが心憎い。作者が感じたように人々が「景観に見える都市でありたいものだ。」  
(選考委員 今村 洋子)

